

腫瘍内科

■ スタッフ（項目見出しスタイル）

科長	片山直之	
副科長	水野聡朗	
医師数	常勤	7名
	併任	5名
	非常勤	0名

■ 診療科の特色・診療対象疾患

1. 腫瘍内科とは

がんに対する治療には、外科治療、薬物療法、放射線治療、内視鏡的治療などがあります。腫瘍内科とは、化学療法などを含むがん薬物療法を専門に行う診療科です。腫瘍内科の主な役割については、下記のようにまとめることができます。

1. 各がん種に対して、根拠（エビデンス）に基づいた標準的治療の実践
2. 個別化治療の実践：病気の種類・性質・進行度などに応じ、個々の患者さんに最も適した治療を提供する。
3. 新規治療の開発：臨床試験、トランスレーショナルリサーチを実践し、新しい治療法の研究開発を行う。
4. 生活の質（Quality of Life：QOL）の改善：腫瘍関連症状や化学療法の副作用の軽減に努める。
5. 治療相談：専門外来、セカンド・オピニオン等を通じて標準的治療に関する相談のほか、臨床試験等の情報提供を行う。

2. 主な診療対象疾患

・乳癌

薬物療法は、乳癌においてはますます重要な存在となってきました。早期例、進行例など病期に応じて下記のような薬物治療を実践しています。

- ・乳房温存などを目的とした術前化学療法
- ・再発予防を目的とした手術後の薬物療法
- ・転移・再発乳がんに対する薬物療法

・消化管腫瘍

当科では、主に切除不能な進行例に対して化学療法を実施しています。特に、食道癌におきましては、消化管外科、放射線治療科との連携により術前・術後化学療法の実施、化学放射線治療を実施しております。

・甲状腺癌

これまで十分な治療法がなかった切除不能な甲状腺癌において、分子標的治療薬であるソラフェニブ、レンバチニブが入手可能になりました。優れた治療を有する反面、重篤な副作用を伴うため、耳鼻咽喉科と連携して、こうした薬物療法を実践しております。

・希少がん

希少がんに対する診療は、三重県における我々の診療科の重要な役割の一つと考えております。希少がんとは“年間の発症率が人口10万人あたり6例未満のがん”と定義されています。具体的には、軟部肉腫、胚細胞腫瘍、原発不明がん、神経内分泌腫瘍などの腫瘍があげられます。極めてまれな腫瘍のため診断が難しい、治療面については有効な薬剤が少ない、診療体制が整備された病院が少ないなど我が国ではまだまだ課題が多い状態です。がんセンター等とのネットワークを通じて、可能な限り最新の情報を共有し、診断・治療方針の決定を行っております。

■ 診療体制と実績

我々のグループでは、がん薬物療法専門医を含むスタッフが診療・研究に従事しております。三重県下にはがん薬物療法専門医が15名（2016年4月現在）しかおりませんが、そのうち5名が当科に所属しております。

いずれのがん種においても、他の診療科と緊密に連携して、病期に応じて手術・薬物療法・放射線療法を含む集学的治療を実施しております。

当科で患者数が多い乳癌においては、乳腺センターと放射線治療科と連携し、病期・腫瘍の性状に応じて化学療法、内分泌療法、抗HER2療法などの分子標的治療薬などの薬物治療を実践しています。

消化管腫瘍のうち、食道癌においては、消化管外科、放射線治療科と連携して、術前・術後治療、放射線化学療法など治療の最適化に努めています。

甲状腺癌においては、当院耳鼻科のほか、甲状腺癌診療連携プログラムを通じて、切除不能甲状腺癌に対して薬物療法を実施しました。

希少がんにおいては、標準治療の実践のほか、愛

知県がんセンター等と東海地区でネットワークを構築し、可能な限り最新の情報を共有し、診断・治療方針の決定を行っております。

■ 診療内容の特色と治療実績

化学療法を含む薬物療法は、QOLの観点からも現在多くが外来治療として実施されております。当科の年間の外化学療法件数は2000件を超えております。病院全体の外化学療法件数の約3分の1を当科が実施していることとなります。化学療法を外来で安全に実施するためには、副作用管理が非常に重要となります。当科では副作用の管理において独自の取り組みにより、より安全でQOLの高い外来治療の提供を目指しています。

■ 臨床研究等の実績

研究面におきましては、主に臨床研究を通じて、新たな治療の開発、治療の副作用対策の研究、腫瘍の予後・予測因子についての研究などに取り組んでおります。

① 新規治療の開発

当科および関連施設では、既存の治療に抵抗性の難治性がんの癌に対して、新規治療の開発を目指して化学療法、分子標的治療、遺伝子治療、免疫療法等の治験、多施設共同試験、トランスレーショナル試験を行っております。

② 予後・予測因子の研究

病気の見通し（予後因子）に関する研究や、どのような薬が効きやすいのか（予測因子）、こうした研究は治療の個別化にとって重要な研究です。新しい治療の開発とともに当科も積極的に取り組んでいます。

③ 遺伝子異常に基づくがんの個別化治療

近年の急速な診断技術の発展により、個々の患者さんについてがん細胞の遺伝子異常を解析することが可能になっています。これからは、がん細胞の遺伝子異常を把握することは、それぞれの患者さんに対する個別化医療を実施する上で重要と考えられています。当院のオーダーメイド医療部等と連携して、遺伝子情報に基づくがん個別化医療の実践を目指しています。

④ 副作用対策の研究

化学療法には、吐気、脱毛、免疫力低下に伴

う感染症など副作用がしばしば伴います。こうした症状を少しでも軽減できるよう副作用対策（支持療法）の研究も行っております。また、副作用における個人差においても、遺伝子情報との関連を検証する研究を行っております。

昨年度は、主に①に関する研究成果を国内外の学会にて公表しました。

<http://www.hosp.mie-u.ac.jp/section/shinryo/shuyounaika/>